

P-2

本学大学院生の研究環境とそれに伴う意識のアンケート調査

○稲永清敏^{1,7}、高田 豊^{2,7}、豊野 孝^{3,7}、荒井秋晴^{4,7}、
後藤哲哉^{5,7}、西原達次^{6,7} 九歯大・¹生理学、²内科、
³口腔組織、⁴総合教育、⁵頭頸解析、⁶感染生物、⁷大学自己評価部会

本邦での歯学部大学院における大学院生の教育、研究に関する意識および実態調査の文献的報告はほとんどない。九州歯科大学では、大学院の教育・研究改革の一環として、大学院生の研究環境とそれに伴う意識の調査を行った。本研究では九州歯科大学歯学部大学院生2, 3, 4年生の全員(43名)を対象に平成19年4月にマークシート方式のアンケート調査を行った。その内34名から回答を得る事が出来た。得られた結果のなかで、特筆すべき事柄は以下のとおりであった。副科目・選択科目の満足度および達成度は、主科目の満足度および達成度より有意に低かった。研究に従事する時間と臨床に従事する時間との間には、負の相関が認められた。高学年では、研究に従事する時間は長く、臨床に従事する時間は短くなる傾向が見られた。研究指導に対する満足度と研究指導時間の間には正の相関が認められた。女子大学院生は、主科目・副科目・選択科目に対する満足度や、研究指導に対する満足度が男子大学院生より有意に高かった。

P-3

本学卒業生・大学院修了生の資質や身につけている能力についてのアンケート調査結果

○後藤哲哉^{1,7}、豊野 孝^{2,7}、荒井秋晴^{3,7}、稲永清敏^{4,7}、
西原達次^{5,7}、高田 豊^{7,2} 九歯大・¹頭頸解析、²口腔組織、
³総合教育、⁴生理学、⁵感染生物、⁶内科、⁷大学自己評価部会

大学における教育の成果・効果を検証するためには、卒業生、教職員、雇用者などの関係者から意見を聴取することが重要である。そこで、大学評価部会は九州歯科大学卒業生・大学院修了生の資質や身につけている能力についてアンケート調査を行った。調査は『基本的資質』(教養、社会常識、責任感・倫理観、自主性・行動力、問題処理能力、態度)、と『能力』(外国語、基礎知識、隣接医学、臨床専門知識、臨床技能)の11項目について、1)卒業生が身につけているか、2)社会に出て重要なもの、3)九州歯科大学の教育で充実しているかどうかについて回答を得た。平成19年度は卒業後5年目(47名)、教職員(169名)、雇用主(27名)から回答を得た。1)については『基本的資質』において教職員の評価が低かった。『能力』については外国語が低く、臨床技能については卒業生から低いという評価であった。2)は『基本的資質』の項目が高く、3)については外国語と臨床技能において卒業生から不足しているという回答が多かった。今回初めて大規模なアンケートを行うことより大学における教育の成果・効果を検証することが出来た。